

Title	ごあいさつ(「市民」とは何か：現代市民社会論の現状と課題(聖学院大学国際シンポジウム))
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.29 別冊 「市民」とは何か：現代市民社会論の現状と課題 特集号, 2004.3：137-140
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3684
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学国際シンポジウム

「市民」とは何か

——現代市民社会論の現状と課題——

パネリスト

マックス・L・スタックハウス

ステイーヴン・カールバーク

古矢 旬

ディスカッサント

古屋 安雄

田中 豊治

大澤 麦

大木 英夫

近藤 正臣

ポール・シユール

ウィリアム・G・クレラ

司会
通訳

大木英夫

これより「市民」とは何か——現代市民社会論の現状と課題」と題しまして、国際シンポジウムを開催いたします。私は、主催者であります聖学院大学総合研究所の大木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。きょうは、三連休の初めの日であります。かなり多くの方々にお集まりいただきました。よほど勉強の好きなお方でないといけないかもしれません。お集まりいただきましたことを感謝申し上げます。

最近（このシンポジウムは二〇〇〇年九月開催）、教育基本法の議論がなされ出しました。この教育基本法は、日本戦前の教育の反省を踏まえて、敗戦後の日本の教育の大道を示すために作成されたものであり、当時の日本人の指導者の英知の結集ともいえるべき性格をもつ文書で

あります。これは、日本人が自主的に作ったものであります。この作成にあたりました教育刷新委員会のメンバーの一人でありました当時の文部大臣前田多聞は「戦前の日本には、シビックスすらなかった」という発言をいたしました。「シビックス」、言い換えれば citizenship の育成ということだろうと思います。公民教育ということ、市民教育と言い換えてよいかと思えます。これは、戦後日本の教育に課せられた重い課題でありました。しかし、日本の政治はその課題の意味も十分に悟らず、それをないがしろにし、何の成果も上げえずしてこの世紀末、教育の荒廃をみるに至りました。この荒廃の責任は、文教政策を含めて戦後の政治指導にあることは明らかであります。

ところが、自らの責任を顧みることを怠り、かえってその責任を教育基本法になすりつけようとしているのです。そして、教育の問題を掲げて日本を反動の方向へと導こうとしている動きさえ明瞭になつてきております。この方向に、日本が舵を切っていたら、市民社会の未熟さによつてもたらされた困難の中にある今日の日本を、

グローバルな市民社会の中にあつて、あのハンチントン教授も予言する、不幸な孤立の未来へと向かわしめるのではないのでしょうか。まさに、世紀末の日本は危機的様相を深めているのであります。

聖学院大学総合研究所は、これまでも長く継続してまいりました市民社会と国家の役割の研究活動を踏まえ、この度この問題の研究において、アメリカ屈指の学者お二人をお招きし、「市民」とは何か——現代市民社会論の現状と課題」という主題のもと、ユニークな国際シンポジウムを開催することになりました。多くの大学が、自己の存続の問題にのみ関心を寄せているようなこの時期に、聖学院大学大学院と聖学院大学総合研究所は、日本の将来に関わる重要な現実問題に取り組むことを自らの社会的な責任の一つであると考え、このような計画を立てた次第であります。総合研究所の体制につきましても、資料集の最後のページに記されておりますのでご参照いただければ幸いです。聖学院大学は、新しい時代には新しい大学が必要であるというビジョンを持って始まった新しい大学であります。その志をご理解賜

り、ご支援いただければ幸いです。

本日の講演者の紹介は、資料集の三ページにありますのでご覧いただきたいと思います。この順序にしたがってご紹介いたしますが、ご起立をいただければ幸いです。ご紹介します。マックス・スタックハウス教授です。こんにちはのアメリカの、キリスト教倫理学会の指導的な方です。最近スタックハウス教授からいただいた本ですが、*On Moral Business: Classical and Contemporary Resources for Ethics in Economic Life*, edited by Max L. Stackhouse et al., 1995, William B. Eerdmans Publishing Company, を編集しておられます。このような経済倫理の背景を論ずるために必要不可欠の資料集を作られました。日本にはこういうものがありません。ステイヴン・カールバーク教授です。聖学院では二度目の来日です。ボストン大学で教鞭を執っておられる、私どもになじみ深いマックス・ウェーバーの研究者であります。古矢旬教授は、聖学院大学大学院のアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科ドクターコースの教授となられる元アメリカ化学会会長有賀貞教授のご友人で、アメリカ研究の

指導的学者であり、北海道大学大学院の教授であられます。

それから、質問者としてたてられております聖学院大学大学院の古屋安雄教授です。アメリカ・ヨーロッパ文化研究科長であります。ちなみに、聖学院大学では「欧米」という使い方が広まっている日本の知的世界にあつて、あえて「アメリカ・ヨーロッパ文化学研究」、こういう性格を明瞭にした研究科であります。次は田中豊治教授です。田中教授は、もう一つの研究科である政治政策学研究科の客員教授であり、また研究所の教授としてもうだいぶ経ちました。ウェーバーの専門家であることはご承知の通りです。もう一人、大澤麦氏は聖学院大学総合研究所の専任講師です。新進と思つていましたが、もう新進ではなくなつてしまいました。学界に注目され出している若い学者の、大澤麦博士であります。

近藤正臣教授は、この資料に書いてありますように国際会議通訳者協会のシニア・メンバーで、先生の学術的な通訳は絶品といわれています。私には古くからの親しい関係の方であります。大東文化大学の教授でありま

す。ドクター・ウィリアム・クレーラ、この先生は聖学院大学の英語学の教授です。日本語、英語、みごとなバリンガルなのでですね。生まれながらではないのです。いかに勉強によつて、こういうことが可能であるかという見本のような先生でございます。ポール・シュー氏、この方は現在聖学院大学総合研究所の特任研究員であります。資料にも書いてありますように、ハーバードの神学部を卒業し、現在はフラー神学大学のドクターコース在学中であります。今、私どもの研究所で研究を続けておられます。

それでは早速、最初の講演をマックス・スタックハウス教授にさせていただきます。